

# 幼稚園における評価の問題



大西 憲 明

## (一)

幼稚園教育要領が新しく実施されるようになり、それにしたがって、目下、現場では指導計画も作成されているようだ。だが、その指導計画は、後に述べるように、いままでの教育要領に即しておこなってきた指導の成果がどのようであり、どこにこんど新しく問題にしなければならぬ面がでてきたか、ということについての検討がなされることから出発する。このことは、いまさら述べるまでもない。ともかく文部省の方では、新要領の精神が生かされるような「幼児の発達の記録」という教育評価の様式が計画されているようだ。これは、教育要領が修正されれば、この修正されねばならなかった基本的なねらいの変更から、とうぜん、そのねらいに即した評価という指導のたしかめ方の新しいくふうが公表されるべきものであるから、われわれは、いまの段階ではこれを待つより他はない。

といっても、なんらかの様式とそこに記入されるべき留意事項が文部省から発表されても、現場でいままでの「発達の記録」を用いて幼児を評価をし、それにどう記入していけば、もつとも妥当性にとみ信頼度を高めるようなものになるかについて苦心してきたようなことが、また、再びおこるのはまちがいない。幼児の成長発達の姿を、教育的見地からありのままに評価すること自体が、考えれば考えるほど技術的にむずかしかったからである。

## (二)

だが、評価のない教育指導計画には現実性がない。幼児の指導の枠づけを強制するものになりかねない。指導計画は、それが実施されたとき、ひとりびとりの幼児のうちに反映されたものを通して再吟味することによって、その価値がたしかめられるものであるし、また、それによってつきに修正されるものでもあるからである。

つまり、どんな教育指導でも、幼児の個性を尊び、その全人格の望ましい発達を願ってなされるものであり、たとえ一斉指導がおこなわれていても、基本的には、集団の中のひとりびとりの幼児の個性が直接の指導の対象にされる。

これにもなつて、この現実の幼児の個性の特徴が明らかにされたり、またどういふ指導法がその特徴のどの面にどんな効果をもたらしてきたか、という点を観察、測定、評価によってとらえる方法がどんなに修正されても、はたしてどこまで、ひとりびとりの幼児を適確に記述し評価することができるか、その際の客観法とか信頼性の検討の問題が、依然として残ってくる。

そこで、まず、どんな様式にせよ、評価すること自体を考える、この目的は、次のようにまとめられることができる。

(一)指導のための資料を次の諸点で得るためである。

・幼児の個性の全般的実態はどうであるか。・幼児が指導目標にどのように達したか。・幼児の個人差はどこではどう働いていたか。・幼児の指導にどんな動機づけが大切か。・幼児の生活環境はどうであり、それが幼児のどういふ面にどう影響しているか。

(二)教師自身の反省資料を得るためである。

・教育原理や方針がどこまであてはまり、どこをどう修正していけばよいか。・指導のための教材や遊具、指導方法のどこが効果的であり、どこが改善されねばならないか。・教師の人格、ふる

まい、ことばのどういふ面が、指導の場でどう影響しているか。

(三)教育の管理の知識を得るためである。

・教育計画、組織、運営のどこに問題があるか。・園内における物的施設とその運営のどこに指導面の問題があるか。・園内の人的管理、人間関係のどの面が指導のためにどう改善されたらよいか。・園外の社会生活を、幼児の年齢に応じてどう経験させるとよいか。・家庭教育をうながし、また、親の協力を求めるにはどう留意したらよいか。

このようにまとめて、それぞれの問題点をつけ加えたが、評価は、前述のとおり、幼児を中心としてこれに関係するいっさいの効果的なものを検討する。だから、評価としてとりあげられる面はいくつもあるうし、その重要さの程度にもさまざまに区別するものがあるうが、それがあくまで、幼児の人格的行動の把握に即してとりあげられ、前述のような意味で評価されなければならない。

そして、実際にこの評価を進めるときの手順としてはつぎの諸点があるう。

(一)評価しようとする目的はなんであり、その目的がどんな面に實際化されておるか、をはっきりときめておかなければならない。

(二)評価をどんな方法で、どういふ場面で行うのがよいか、を定める。とくに評価する方法として、観察(自然観察、組織的観察)、測定、調査などの方法ははっきりと選んでおく必要がある。

(三) 評価方法をどのように、教育の中に適用すれば、むりなく、しかも確実に実施できるかを計画してから実施する。

(四) 評価したいいろいろな結果を合理的にまとめ、それを教育的価値の立場からさまざまに考察する。

(五) 教育実践としての教育課程、指導計画、指導法などにとりいれて解釈し、次の教育活動のための参考にする。

いずれにしても、どんな評価方法を用いるかとか、実施した結果をどう解釈していくかは、もっぱら評価の目的によってきまる。したがって、新教育要領が教育上のどんな面に重要性をおいているかが明らかにされないとい、効果の乏しい評価になってしまう。つまり、どんなに「発達記録」の新様式がつけられても、そこにまた新しい評価項目が多くとりあげられても、前に強調したとおり、教育指導のねらいや着眼点が、評価者によってはっきりと定められておらなければならぬ。

### (三)

この点改訂された教育要領の中の基本方針は、基本的生活習慣と正しい社会的態度の育成、道徳性の芽生えの培い、健康安全の教育の徹底、強健な心身の基礎の養い、自然および社会の事象について関心をもたせ、思考力の芽生えを培う、正しいことを身につけさせる、創造的な表現力を伸ばす、生活適応に必要な習慣・態度・技能を身につけさせる、などをねらっている。そして、このねらいを

実現するための教育課程を編成する留意点があげられ、六領域と呼ばれる教育内容の諸項目も列挙されているし、指導上の一般的留意事項もつけ加えられている。

ゆえに、評価は、この六領域に即した幼児の人格的行動が基本方針からみてどう指導によって変容しているかを明らかにするわけである。実際的には、「社会」領域をとりあげてみると、個人生活や社会生活における望ましい習慣や態度、身近かな社会事象についての興味、関心度を評価することになっている。このためには「自分でできること」をどこまでできるかとか、「明るくのびのびと」どう行動するかとか、「人に迷惑をかけたら」どこまでまもれるかと、か、などの望ましい諸項目についてのいちいちの幼児の日常行動をみながら、しかも指導法に即し、全人格にわたって継続的に観察して、そこになんらかの基準にもとづいた段階で表現していかねばならない。こういう諸項目をいちいち指導するにしても、その結果をただちに段階つけて評価することは、既に述べたとおり容易でない。つまり「明るくのびのびと行動する」という指導項目でも、明るいという人格的安定さをどういう日常行動のうちに見出し、その最も明るいものとはどんな姿であり、その反対の極はどんな姿であるか、さらにこの両極端の間に位置する姿を段階別に二段階とか三段階とかに分けるとすれば、そのおのおのほどういう姿であ

るか、ということになると、その弁別する基準がはっきりしていかぎりでは曖昧になる。評価は、望ましい姿と現実の姿との間の関係づけをおこない、望ましい方向にどう発達していくかを明らかにする計画的な試みであるが、それを位地づけるためのなんらかの基準となるものが不明瞭である場合には、評価者の主観的弁別となり、その結果、信頼性や妥当性を失いやすい。

「人に親切にし、親切にされたら礼をいう」にしても同様であつて親切にする項目の内容や段階づけられるいちいちの行動の弁別はむずかしい。数量的に測定する能力的なものであれば段階づけは容易であるが、こういう全体的人格像のありかたとか価値的に評定する行動であると、「いつも、ときどき、めったにない」とか「たいへんに、少しは、あまり少ない」という頻度や質的程度によつて区別するより他はない。しかも、教育要領に列挙された項目にはこういう性格のものが多い。「自然」の中の「喜んで屋外の自然に接したり、いろいろの自然の事物を利用して遊ぶ」とか、「言語」の「先生や友だちの話を親しきもつて聞く」なども同様で、指導によつてどれぐらいこういう行動が変容したか、をきめるための基準も尺度もない。もちろん、いちいちの項目をすべて評価するわけではなく、大項目の中に包含され、それを基礎づけるものとして評価するのであるが、前述のように、なかなか確実さを得にくい。知識や能力的なものであれば測定されるが、態度とか人格特性

であればおおまかな評定をするより他はない。とくに、教育要領がねらっているような道徳性、さらにこれの内面化をとりあげると、どこまで客観的にとらえられるかにはやはり疑問が残る。

#### (四)

以上、評価は教育上不可欠のものであるが、これをどう新しく具体化するればよいか、ということになると、従来の様式による場合と同様に、技術的な問題がでてくる。しかし、実施はしなければならぬ。そこで、文部省によつて評価様式がどんなふうに表示されても、教育をするかぎりは、指導の目標をはっきりと立て、しかもこれが抽象的にならないように明確に叙述し、これを幼児の全人的発達の現実に関係する面とをとりあげて評価計画をたてなければならぬ。そしてこの計画にしたがつていちいち幼児についての資料を集めることである。

ここで大切なことは、評価は継続性をもつ営みであるから、記録するために資料を集めるのでなく、幼児と一緒にいるかぎりいつも評価する態度をとることであつて、ある特定の場合の評価であつてはならない。また、資料にもとづいてつねに診断的にあたるべきであるが、それも客観的態度を維持することである。いづれにせよ、指導計画ができると評価はこれに続くものであるかぎり、つねに評価の問題に関心をもつことが、明日の教育のためにも大切である。